

り、聞も無益のわざと覺侍、よくく心得べき事にや侍らん。

〔奇異雜談集三〕丹波の奥の郡に人を馬になして賣し事

はるかかのむがし、たんばの國おくのこほりの事なるに、山ぎはに大なる家一軒あり、隣もなし、人数十人あまり、渡世心やすくみえたり、農作をもせず、職をもせず、あきなひをもせず、心やすき事人みなふしんす、馬をかひにゆくとも見えぬに、よき馬をうれり、一月に二疋三疋うるゆへに、これまた人ふしむするなり、かいどうなるゆへに、旅人一宿する事あり、ないく人の申は、亭主大事の秘術をつたへて、人を馬になしてうるといへり、一定をばしらざるなり、あるとき旅人六人いきたり、五人は俗人、一人は會下僧なり、亭主うちへ請じいれて、枕を六つ出して、御くたびれるべし、先御やすみあれといふ、俗人みな臥たり、客僧は丹後にて、粗きくことあるゆへに、ようじんとする也、ざしきのおくにゐてふさず、垣のひまより内をのぞけば、いそがはしくみえたり、小がたなにて、かきのひまをすこしくりあけてよくみれば、疊の臺ほどなるものに土一盃あり、そのうへに物のたねをまきて、上に薦をさせたり、釜には飯をたき、汁をたき、鍋に湯をたけり、茶四五ふくのむほとして、もはやよかるべしとて、こもを取れば、あをくとしたる草二三寸にをひしげりたり、葉は蕎麥に似たり、それをとつて湯に煮て、そばのごとくにあへて、大なる椀にもりて、さいにして飯を出したり、俗人おきて皆食す、めづらしきそばかなといふて賞翫す、僧は食するよし、て、すみのすのこの下へすてたり、饌をあげてのち、風呂をたきてたちて候、一風呂御いりあれといへば、もつともしかるべしとて皆いれり、僧はいるよし、て、わきへは、づして、東司のうちにかくれるてよくみれば、亭主きり、かなづち、かなくぎをもちきたりて、風呂の戸をうちつけたり、客僧こゝにゐて、人にみつげられては曲なしとて、くらまぎれに出て、風呂のすのこの下へいりて、しづまりゐてみれば、良ありて亭主、もはやよきぞ戸をあげよといひて、釘ぬきにて戸を